



教育委員会だより

「多久から発信！SDGs」

「自分が好きな自分へ」

「なんで女子はスカートを着るの？、男子はスカートないの？」

これは、私が友達と制服についてのプリントを見ていた時に発した言葉です。このことについて友達から「絶対そんな着る人おらんって」「そんな人おったらヤバイ」と笑いながら言われました。なぜ男性がスカートを着てはいけないのでしょうか。今は多様性の時代と言われているけれど、実際はジェンダー平等に対する認識はまだ低いと思った瞬間でした。男は男らしく、女は女らしくという考え方がまだ少し残っているようです。その考えを私は無くすべきだと考えます。なぜなら、今の社会は一人一人の個性を大切に、認め合うことが大切だと思うからです。別に男性がスキんケアをしてもおかしくないし、女性がズボンをはいてもおかしくないのに、なぜ男性がスカートをはくことがおかしいのでしょうか。

確かに、男性がスカートをはく姿を見ることはめったにありません。だから「スカートを着たい」というのはとても勇気がいると思うし、学校や公共の場にスカートを着ていくと様々な目で見られることもあるかもしれません。ですが、そんなことを気にせずに、自分が好きな洋服や髪型をして生きていいと考えます。他人の目などに気にせず、自分のありのままの姿でいてほしい。私自身も多様性を受け入れていきたいと思っています。



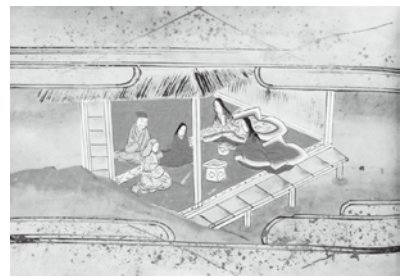
東原 彦 中央校

7年3組
上瀧 花音

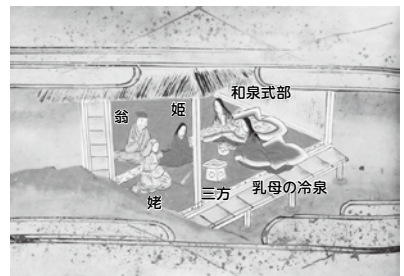
紫式部・和泉式部・小式部の物語 挿絵(9)

多久家資料「小しきふ小式部」を編集

『小式部(下)』挿絵9 和泉式部が子に再会する話



事情を聞くうち東寺に置いた玉手箱にたどり着き、箱に残した歌から和泉式部は我が子と確信します。



和泉式部と幼子による和歌の贈答の後、出てきた筆は上品・優美で、しかも老夫婦とは年が離れていました。和泉式部が事情を聞くと、老夫婦は「東寺の門に捨て置かれた子で、色付きの衣を着せられ、時絵の箱に入れられていた。その箱は今もあり、歌が書かれていた。」と答えました。「それならば私の子に間違いありません。」といい、箱に記した和歌「みなかみにも夜のしもはふらばなぬかなぬかの月といはれじ」(すべての髪に百夜続けた霜が降るならば降れ七七日で十四日の小望(子持)月とは言われまい)をそらんじ、歌が一致することを示しました。

和泉式部が「この子が私の子だと分かったので都に連れて上りたい。」と言つと、老夫婦は固辞しました。姫もまた「私も承諾できません。何の罪で何が嫌で私を捨てられたのか。姥と翁が私を拾い、大切に育てられた恩を忘れ、都へ参ることは決してありません。」と涙を流して恨みました。「挿絵9」和泉式部は言葉もありませんでした。これも親吉様の御利益で娘に逢えたわけ、この由を都に伝えました。すると姥と翁の衣装まで準備され、三人を連れ上京することができました。このことを朝廷も聞き届けられ、丹後の国、与謝の郡を与えられました。老夫婦もそこへ移り豊かで幸福に暮らしたと、物語は記しています。

※原本の挿絵は色絵になっています。郷土資料館に写真を掲示していますので、お立ち寄りの際にご覧ください。

多久市郷土資料館長 藤井伸幸

市民文芸

◆数十年 自宅看護の未入院

果ての逝去を友よ歎くな

尾形 節子

◆戦争を消せる消しゴム創れたら

世界平和が現実になる

野崎 隆幸

◆ストローで飲ませたビール美味しいと

夫の言葉が最後になるとは

梶原恵美子

◆おだやかに話すがときき声聞こゆ

電話のむこうの七か月の孫

川浪 信子

◆立冬の朝の風にゆるる花

こぼれ種生れて咲きしあさがお

浦野 嘉恵

◆冬めくや路地裏にあるジャズ喫茶

富樫 明美

◆杖持つて歩く日課の草もみぢ

武富 律子

◆三泊のバッグの重く師走来る

おおやはな

◆彼の世へと人また一人冬の夜

本村 則子

◆鼻をかくまつてゐる雑木林

大石ひろ女

◆思い出が続々顔出すおもちゃ箱

大谷 和

◆女手の苦勞刻んだ皺の数

小副川ヨシエ

◆再会を心に刻む星の夜

井上 東子

◆刻まれて名作と成る石の像

西山 残月

◆刻み食ゆつくり喉へ生きている

田代まつこ

短歌 《麦の芽短歌会 互選》

俳句 《大石ひろ女選》

川柳 《多久川柳会 互選》